

近世陣屋と町の形態に関する再検討

—陸奥国南部を事例として—

土 平 博*

Reexamination Concerning form of Jinya - Town at the Early Modern Period ;
A case of The Mutsu region

Hiroshi Tsuchihira

要 旨

本稿では、既往の近世陣屋町に関する研究で用いられてきた「陣屋町」という語をあらためて捉え直すねらいがある。「陣屋」と集落が一体化した小都市の形態が「陣屋町」であるが、それはとくに畿内やその周辺、および西日本の地域に多く分布する。既往の事例研究では、小藩の陣屋町を対象としているので、そのような地域に偏在する傾向が表れるようである。「陣屋」は小藩のものだけではない。

そこで、陸奥国南部を事例にして、「陣屋」と集落の位置関係を検討しながら、小都市としての「陣屋町」の再検討を試みた。陸奥国南部（現福島県域）では、幕府領、旗本領、藩領が混在したが、藩領についてみると、他地域に本領をもつ大名が飛地領をもっており、また、それは一時的に存在していた。また、それらの飛地領は幕府領や旗本領などと相互交換が行われることもあり、その拠点として構築された陣屋は、幕府代官陣屋から藩の飛地領陣屋へ、また、藩の飛地領陣屋から幕府代官陣屋へと転用されていた。さらに、飛地領の発生により新規に構築した陣屋もあった。そのような陣屋は、既存の集落に隣接して構築される例が多くみられ、本来、「陣屋町」として計画された小都市とは言い難い。

I はじめに

近世の「陣屋」は多義にわたっている¹⁾。それは領主の所領の拠点に置かれた城以外の様々な構築物をさしていたからである。ゆえに、既往の研究では、研究者が個々の構築物を「陣屋」としてとらえ、それのみを対象としたり、また、集落部を含む範囲を研究対象としてきた。つまり「陣屋」の捉え方は研究者自身に委ねられており²⁾、たとえば後者の場合、「陣屋村」³⁾や「陣屋町」とみなしたり、城下町に類似することから「陣屋町」や「陣屋村」とせず「小城下町」と扱ってきた。陣屋に対する研究者の捉え方や研究方法はさておき、その対象は畿内およびその周辺、ならびにそれ以西の地域で、かつ、いわゆる「1万石クラスの大名」や高禄の旗本が構築した陣屋であった。それらは陣屋、侍屋敷地区、町屋敷地区が一体化した小都市であり、宛われた語は「陣屋町」ないしは「小城下町」であった。武家の家格上、城持ちでない大名が存在したた

2008年9月18日受理 *文学部地理学科准教授

めに、それらの大名は城の代用として陣屋を構築した。それゆえ既往の研究では「城」に対する「城下町」と区別して「陣屋」に対する「陣屋町」という用語が宛われてきた。「陣屋町」の構造や景観が「城下町」に似ていることから、「陣屋町」という用語を用いることに疑問視する見方もある⁴⁾。

江戸時代、全国各地に構築された陣屋は、すべてにおいて侍屋敷地区、町屋敷地区を備えていたとはいえない。陣屋が単体で存在していたという報告もみられる。陣屋が構築された場所に侍屋敷地区や町屋敷地区が必ず配置されていたという短絡的な見方は避けねばならないし、そのようなタイプの陣屋に対して「陣屋町」や「小城下町」という用語を適用するべきではない。その判断には、個々の陣屋について一つ一つ検討を積み重ねる必要がある。

さて、本稿では前述のことをふまえながら陸奥国南部を研究対象として検討を試みる。同地域には、江戸初期から中後期にむけて、陣屋が増加する傾向にあった。しかも、単純な増加傾向ではない。

個々の陣屋を検討して、侍屋敷地区、町屋敷地区の部位が付帯する「陣屋町」や「小城下町」という形態が成立していたかについて明らかにしていくことが本稿の目的である。この地域の分析を通して既往の研究成果と関連づけることで、今後さらに考察が進むと期待できる。本稿はその予察的な検討として次のように進める。

本稿では、まず「陣屋」をとらえなおすことから始めたい。前述のように「陣屋」は多義であるが、再度検討の余地が残されるからである。そこで二つの角度から整理してみたい。その一つは、幕府の陣屋と大名（藩）の陣屋という大区分である。もう一つは、所領構造のなかでそれぞれをとらえ小分類するという区分である。次に、分類した「陣屋」にしたがって、陸奥国南部の所領構造と陣屋の分布について述べていく⁵⁾。さらに、個々の陣屋について、陣屋構築の経緯、侍屋敷地区や町屋敷地区の配置、つまり「町」の成立や位置関係などを比較検討していく。

Ⅱ 「陣屋」分類の再検討

Iをふまえて、「陣屋」の分類について、大分類として構築者別に整理し、そして、小分類として所領構造の点から再検討してみる。

1 構築者と陣屋

幕藩体制の下、全国各地に構築された陣屋は、構築者別にみると幕府の陣屋と大名（藩）の陣屋に大分類できる。

幕府の陣屋としては、①幕府が直轄領を統轄するために構築した「代官所」、「代官陣屋」、「陣屋」、②旗本が所領の拠点に構築した「陣屋」、③旗本のなかでも高禄の交代寄合が所領の拠点に構築した「陣屋」に分類できよう。交代寄合は在地性が高く、それゆえ他の旗本よりも規模の大きい居宅や家臣団屋敷を備えた陣屋を構築することが多かった。本稿では、ひとまず①を「幕府代官（郡代）陣屋」、②を「旗本陣屋」、③を「交代寄合陣屋」と区別しておく。

大名の陣屋とは、城持ちでない大名が城のかわりにもつ建物をさす。大名の所領規模からみる

と1～3万石程度の小規模な藩がこれに相当し、その陣屋は城と同様に藩領の政治的・軍事的拠点であった。ここでは、これらを「大名（藩）陣屋」としておく。『武鑑』によると、大名の居所区分を「城」とするのに対して「在所」と記しているが、この「在所」に相当するものが「陣屋」である。

また、大名は分家させることにより新たに立藩させる場合があったが、これを「本藩」に対する「支藩」と位置づけられる。それらには「本藩」から独立的な「支藩」と半ば独立的な「支藩」とがあり、独立的な「支藩」の場合には在地に陣屋が構築された。これも大名として独立しているのでやはり「大名（藩）陣屋」としたい。

2 所領構造と陣屋

「陣屋」は、所領構造の点から区分することができる。

全国各地に分散する幕府直轄領を統轄するために幕府は陣屋を置き代官を派遣した。支配機構上、「元陣屋」と「出張陣屋」に区分された。組織上、上位に位置する「元陣屋」に対して下位に位置する「出張陣屋」が置かれた。広大な幕府領は全国的にみれば分散していることになり、その統括のために代官・郡代のための陣屋が各地に構築された。

大名が構築した陣屋は、小藩であり、幕府から城をもつことが許可されず、また、城の代用として構築されたものだけをさすとは限らない。大藩では、とくに外様大名の場合は一円的な所領形態をし、譜代大名の場合は分散的な所領形態をする傾向があった。大藩の外様大名は、一国一城令の制約からこれまでの支城を破却せざるをえず、拠点的な城ひとつを残して巨大な城下町を建設した。そこで、これまでの支城の代替として構築物を置いた。たとえば、仙台藩、岡山藩、鹿児島藩の事例が該当する。その呼称は様々で、仙台藩では「要害・所」、岡山藩では「御茶屋」、鹿児島藩では「麓」であった。呼称はさておき、領域の拠点たる城以外の構築物を「陣屋」とするならば、これらも一種の「陣屋」とみなすことができよう。

周防・長門両国の毛利家も所領構造の点からみると同様であるが、ただし同家の場合、支藩として独立しているので、前掲の諸藩と異なる。

領内の軍事・治安維持・政治・経済など事情により、構築物の呼称や形態上の違いを生む。仙台藩、岡山藩、鹿児島藩の場合、呼称は「城」や「陣屋」ではないが、実際にその意味をもち、形態上は侍屋敷や町屋敷が計画的に配置された一種の「小城下町」であった。

譜代大名の所領は分散的傾向が強かった。とくに幕府要職に就く譜代大名は役料として本来の所領とは別にまとまった所領が与えられた。つまり、大名が拠点としていた城周辺の所領である「城地」とは別に「飛地」が発生することが多かった。その場合、「飛地」を統轄するための建物が構築された。これらも「陣屋」と称していたが、それ以外にも「役所」、「代官所」と称することもあった。また、城持ちでない大名で、しかも「飛地」が発生した場合には、「城地」にあたる本拠地の拠点においても陣屋を構築し、さらに「飛地」にも陣屋を構えていた。ここでは「飛地」に陣屋が置かれ、城地とは別に飛地が統括されていた場合を「飛地領」とし、その統括のための陣屋を「飛地領陣屋」とする。

Ⅲ 陸奥国南部の所領構造と陣屋の分布

Ⅲでは陸奥国南部の所領構造を概観しながら、Ⅱで検討した内容をふまえて大名（藩）陣屋および飛地領陣屋について検討していく。

1 藩領と大名陣屋

陸奥国の北部に弘前藩・盛岡藩・仙台藩の大藩が位置するのに対して、同国の南部では、江戸時代初期、磐城平藩12万石、相馬藩6万石、会津藩60万石をはじめ、棚倉藩5万石、白河藩10万石、三春藩2万石、二本松藩5万石が相次いで成立した。これらの諸藩は城を中心に藩領が設定されていった。諸藩領の空隙地帯には幕府領や小藩の領域が設定された。泉藩2万石、浅川藩1万石、菊多藩2万石、湯長谷藩1万石がそれにあたる。延宝期以降にも守山藩2万石、下村藩1万石、桑折藩2万石、下手渡藩1万石、梁川藩3万石が成立した。これらの小藩の拠点は陣屋であり、Ⅱで提示した「大名（藩）陣屋」に相当する。

福島藩は延宝7（1679）年に本多忠国15万石の入封によって成立したが、その後断続的に藩主は堀田氏10万石、板倉氏3万石と交代した。福島藩が小大名化するにあたり、その領域も小域化した。そのようにして割り出された所領は他領へと転用された。

陸奥国の所領配置については、北は固定的な大藩、南部は一部を除き流動的な中小藩が存在した。この南部が現在の福島県域とほぼ一致する。同国南部は大名陣屋が比較的多い地域として特徴づけられよう。

2 飛地領陣屋の構築

陸奥国南部は、中小藩が多く配置されたのと同時に、他国に拠点をもつ大名の飛地領が多く創出された地域としても特徴づけられる。

元禄期に秋山陣屋と長沼陣屋が構築され、その後、寛保・延享期に浅川陣屋、窪田陣屋、保原陣屋、神谷陣屋、梁川陣屋、内町陣屋が相次いで構築された。ついで、寛政・享和期には、一度廃止されていた梁川・神谷陣屋が再設置されたほか、新たに前田陣屋・蓬田陣屋・湯野陣屋・八島田陣屋・瀬上陣屋が構築された。さらに天保期以降にも井出陣屋、赤坂中野陣屋、上郡山陣屋、小浜陣屋が新たに構築された。

諸藩の飛地領や旗本領の創出は、福島藩の事例で挙げたような藩領の縮小や幕府領の縮小と関係があった。逆に、諸藩の飛地領の解除は幕府領の規模拡大につながった。つまり、幕府領と諸藩の飛地領は、常に暫定的な配置として設定されていたことが考えられる。よって、領内の拠点として構築された陣屋は、幕府代官陣屋から諸藩の飛地領陣屋へ転用されたり、またその逆に転用されたりした。その例として、窪田陣屋が、窪田藩（大名）陣屋から幕府代官陣屋になり、その後、棚倉藩（飛地領）陣屋へ転用されたことを挙げておく。他にも事例は多い。長沼陣屋は、幕府代官陣屋から長沼藩（大名陣屋）へと転用された。梁川陣屋は、梁川藩（大名）陣屋から幕府代官陣屋へと転用された。田島陣屋については、会津藩に幕府預かり領が断続的に生じたため、

その都度、陣屋の所轄が変更となっていた。さらには、宇都宮藩（飛地領）陣屋が下村藩として大名陣屋に転用された事例も挙げておこう。

Ⅳ 陣屋と町の形態

1 大名陣屋と集落

大名陣屋は、先に城持ちでない大名の居所や政庁をさして「陣屋」としたが、それは大名所領の拠点であり、城に代わるものであり、町を併設していることが多かった。既往の研究では、この種の「陣屋」の場合、城下町と同様、陣屋および計画的な町をさして「陣屋町」とみなしてきた。それは城下町の一種ともみなすことができ、城下町の小型、「小城下町」であった。このようなタイプの陣屋町の事例は、畿内とその周辺に多い。むしろ、既往の研究対象地域が畿内とその周辺を中心にしてきたことがその一因であろう。他地域でも、個々の陣屋を対象としてきた研究事例はみられるが、それらを全国的な枠組みのなかで位置づけた研究例は少ない。

さて、陸奥国南部には、湯長谷陣屋、泉陣屋、下手渡陣屋、大久保陣屋、守山陣屋、梁川陣屋があった。これらは、既往の研究で提示されてきた陣屋町に相当するのであろうか。以下、個別に検討してみたい。

（1）湯長谷陣屋

元和8（1622）年内藤政長が上総国から磐城平藩7万石として入封し、2代藩主忠興が隠居する寛文10（1670）年に、忠興の三男遠山政亮に陸奥国磐前・菊多2郡内の新開田1万石を分与したので湯長谷藩が立藩した。延宝4（1676）年、磐前郡下湯長谷村に陣屋が構築された（図1）。その規模は約6,000坪であった。明治4年廃藩当時の「湯長谷藩御陣屋絵図」によると、藤原川と湯本川に挟まれた丘陵部に陣屋が構築されていたことがわかる。現在の磐崎中学校付近が陣屋跡に相当する。表門付近には下屋敷や家老屋敷、侍屋敷、足輕屋敷が配置されていたという。陣屋と侍屋敷地区が一体となって高台に構築されているが、集落部はその麓に展開している。両者を直結する道路が備えられているが、空間的な隔たりは大きいといえよう。

（2）泉陣屋

泉藩は寛永11（1634）年に、内藤忠興の弟正晴が分与されて成立した藩である。その領域は菊多郡内の34ヵ村合計1万5,000石であった。藩主は内藤氏以降、板倉氏と続き、後に本多氏の時に武蔵国埼玉郡内8ヵ村、上野国勢多郡9ヵ村合計5,000石が加増されて合計2万石になった。

泉藩陣屋は、初期には飯野八幡宮に近い高月に置かれたという。2代藩主内藤政親が寛文8（1668）年に泉村に移設した。陣屋は菊多郡泉村と滝尻村の境界付近の釜戸川東岸に構築された（図1）。陣屋の敷地は東面112間、南面119間、西面117間、北面125間で堀と土塁によって囲まれていた。この陣屋に隣接して、泉村側に上町、滝尻村側に仲間町、下町、横町が付帯した。

（3）下手渡陣屋

下手渡藩は文化3（1806）年に立花氏が1万石で入封し立藩する。領域は伊達郡内10ヵ村であった。嘉永3（1850）年には一部領知替えによって4ヵ村が上知された。代わって筑後三池郡内に領地が与えられた。安政2（1855）年の領知目録では伊達郡内6ヵ村6,925石と筑後国三池郡内4ヵ

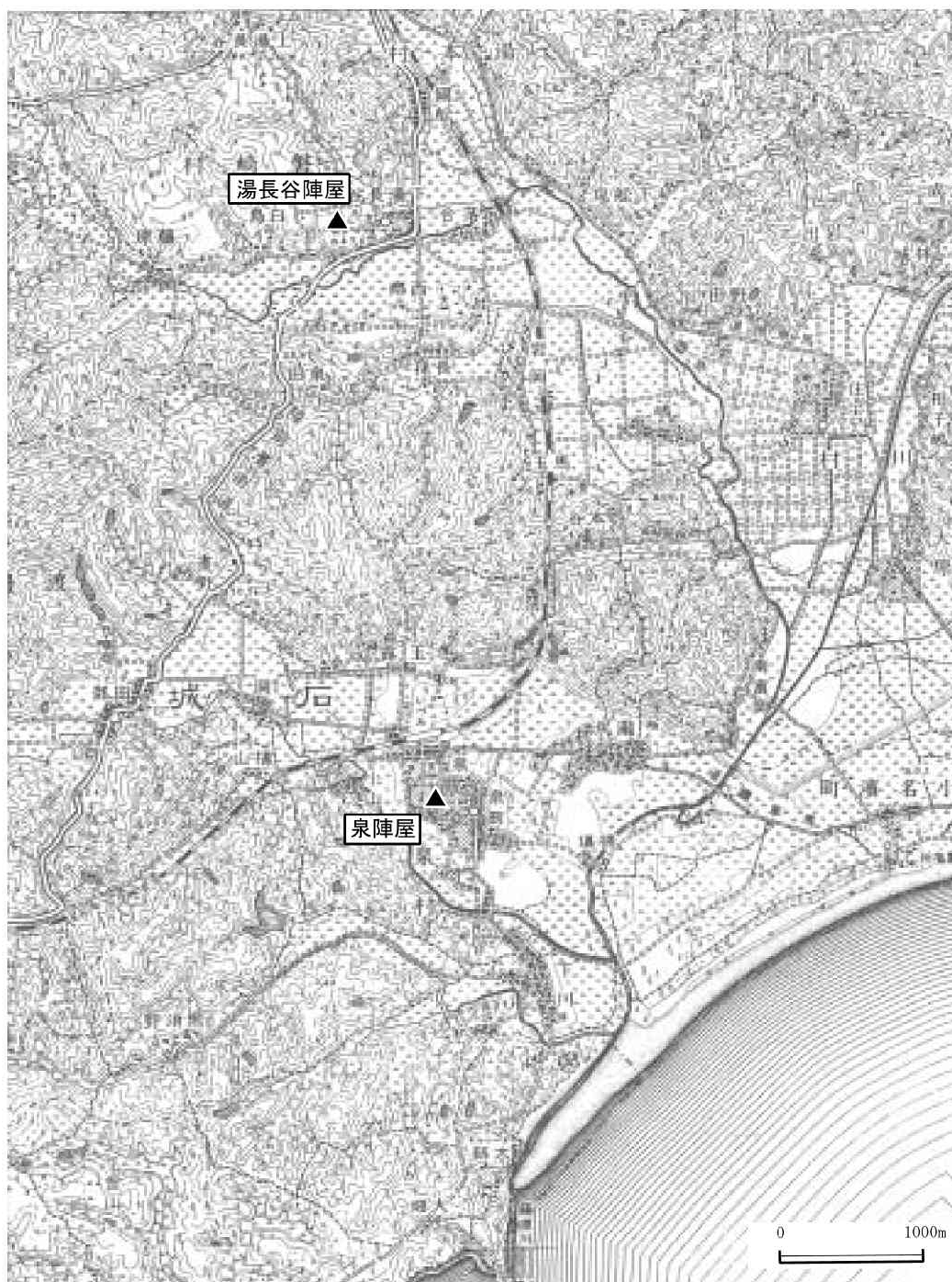


図1 湯長谷陣屋・泉陣屋位置

資料) 陸地測量部 5万分の1 地形図「小名浜」(明治41年測図同44年製版)

村5,071石としている。伊達郡は伊達氏の本領であり、手渡村は遠藤氏の領地であった。その後、蒲生氏、上杉氏を経て天和2（1682）年に幕府領となっていた地域であった。

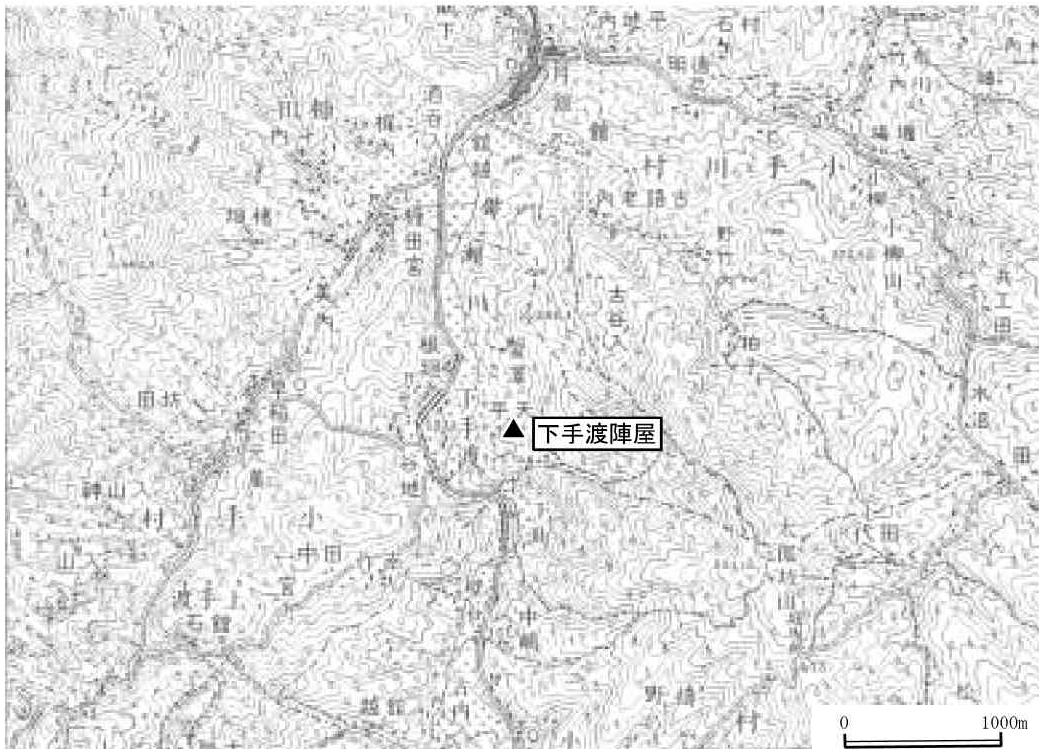


図2 下手渡陣屋の位置

資料) 陸地測量部 5 万分の 1 地形図「保原」(明治 41 年測図同 44 年製版)

陣屋は下手渡村内の広瀬川東岸の丘陵上の字天平に構築された(図2)。敷地面積は5,895㎡であった。陣屋に隣接した町はない。下手渡村の集落は低地部にあり、陣屋との間には水平距離および垂直的な隔たりも大きい。

(4) 大久保陣屋

大久保藩は、天和2(1682)年から元禄6(1693)年の間、本多正利が、旧幕府領のうち11ヵ村1万石余を与えられて成立した藩であった。大久保村の字宿に陣屋が置かれた。大久保村には、現況から判断すると計画的に町が整備されたと考えられない。農村集落の一角に陣屋が構築されたようである(図3)。

(5) 守山陣屋

寛文2(1662)年に徳川頼房の四男松平頼元が水戸藩より2万石が分与されて成立したことに始まる。元禄13(1700)年、松平頼貞が陸奥国田村郡、常陸国行方郡・鹿島郡・茨城郡の内合計2万石所領で立藩した。同家は定府大名であったため守山には代官陣屋が置かれた(図4)。所領が2ヵ国に分散しているため、当初の陣屋は常陸国鹿島郡松川村に置かれた。よって松川藩とも称した。宝暦6(1756)年に陸奥国田村郡守山村に陣屋が移設されたので守山藩と称した。さらに、明治3年に陣屋は松川村へ移設され守山陣屋は廃止された。このように所領分散によって陣屋が移設する例は他にもあった。

陣屋は谷田川の東岸の中町に置かれた。総面積は1,999坪である。守山村内に街村状の集落が形

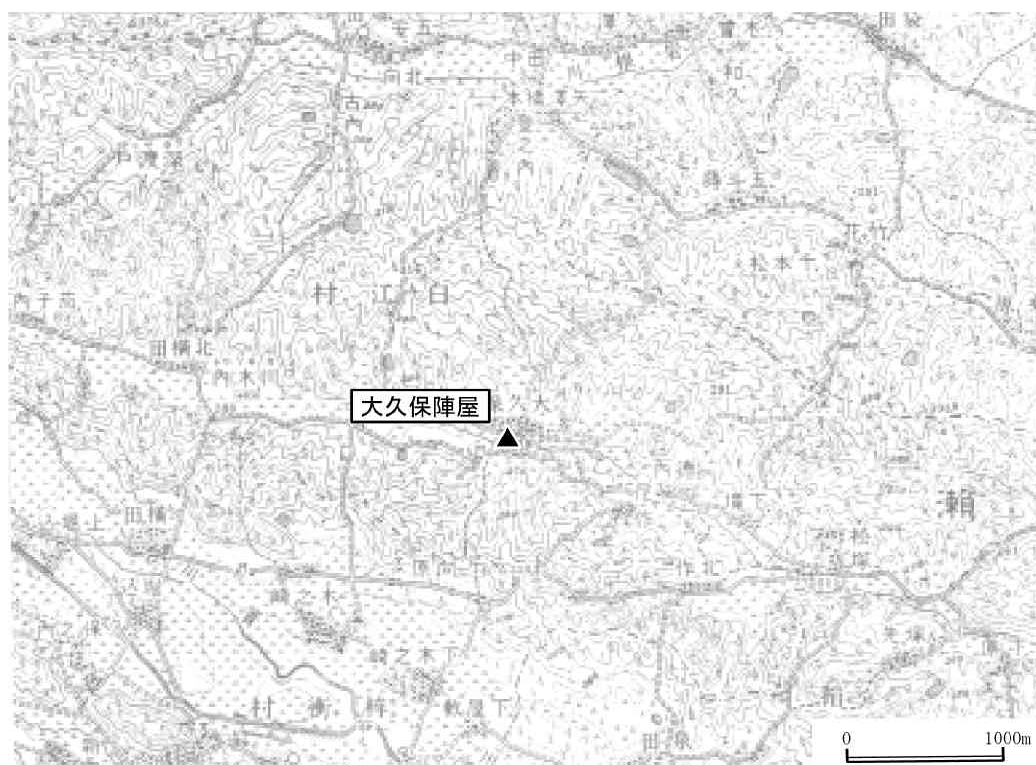


図3 大久保陣屋の位置

資料) 陸地測量部 5 万分の 1 地形図「須賀川」(明治41年測図同42年製版)

成されている。殿町、小姓町などの地名が伝わっている。しかし、陣屋を中心に形成された計画的な町ではなく、既存の街村集落の一角に陣屋が構築された。

(6) 梁川陣屋

梁川藩は天和3(1683)年に松平氏が伊達郡30ヵ村3万石で入封し、同氏が梁川城跡の三の丸に陣屋を構築した。享保14(1729)年に松平氏は無嗣絶家のため上知された。すぐに、尾張藩徳川藩主綱誠の子通春が入封したが翌15年には尾張藩主となったために梁川藩は廃藩となった。

大名陣屋として再び機能したのは、文化4(1807)年に松前氏が蝦夷から国替えによって成立した梁川藩領が成立した時であった。しかし、文政4(1821)年には松前氏は旧領の松前に再び国替えとなって廃藩となったため大名陣屋の機能はなくなった。

松平氏が構築した陣屋は、廃藩後、幕府領になった際に幕府代官陣屋として一部が使われたといわれている。また、松前氏が入封した際には、旧梁川城本丸跡に殿舎や政庁が建てられてたという(図5)。松前氏は梁川周辺には9,000石の所領に過ぎなかったが、常陸国信太郡・鹿島郡・河内郡・上野国甘楽郡・群馬郡にも所領が分散しており、合計1万8,000石であった。

梁川は、伊達氏によって梁川城が築城された時に城下町として整備されており、伊達氏の転出後に梁川城が破却された後も町場は残されていた。その後、陣屋が城跡に構築された。町場は田町・本町・中町・後町・新町・上町・天神町・清水町・栄町・古町の各町から構成されていた。この町は梁川村内に位置し、農村部とは区別された。天和3年松平氏が3万石で入封した時には、



図4 守山陣屋の位置

資料) 陸地測量部5万分の1地形図「郡山」(明治41年測図同42年製版)

すでにこれらの町は存在したので、この場合、陣屋の構築とともに整備された本来の陣屋町ではない。松平氏・松前氏の藩政期以外にも、陣屋は幕府代官陣屋として機能した。また、周辺農村からの年貢米を保管する蔵が置かれた。定期市が立つなどから梁川は農村地域の核の一つとして存在した。

(8) 桑折陣屋

桑折陣屋は、貞享3(1686)年に幕府領6万8千石を統括するために構築された。元禄13(1700)年には、白河新田藩主奥平忠尚が伊達郡20ヵ村2万石に転封となったため、桑折を中心とする桑折藩が成立した。延享4(1747)年に、奥平氏は上野国篠塚へ転封となり、幕府領となった。桑折陣屋は、幕府代官を常駐させるために構築されたが、奥平氏の入封にともなって、藩陣屋に転用された。幕府領に復した時には幕府代官陣屋として使用された。さらに、この陣屋は、安永4(1775)年から寛政元(1789)年まで仙台藩領預地を統括する陣屋として引き継がれた。桑折村は奥州道中から羽州街道が分岐する交通の要衝となり、桑折宿が形成された。桑折宿は南北に長い街村集落となり本町・北町・西町に分かれていたが、総称して桑折町と称した。その桑折町南端に陣屋の敷地が選定された。天保13(1842)年時の陣屋敷地は1町1反5畝余であったらしい。宿の成立は慶長期頃とされるので、陣屋はその桑折町に隣接して構築された。

(7) 下村陣屋

天明7(1787)年、田沼意明が遠江国相良3万7,000石から陸奥国信夫郡6,792石と越後国頸城郡

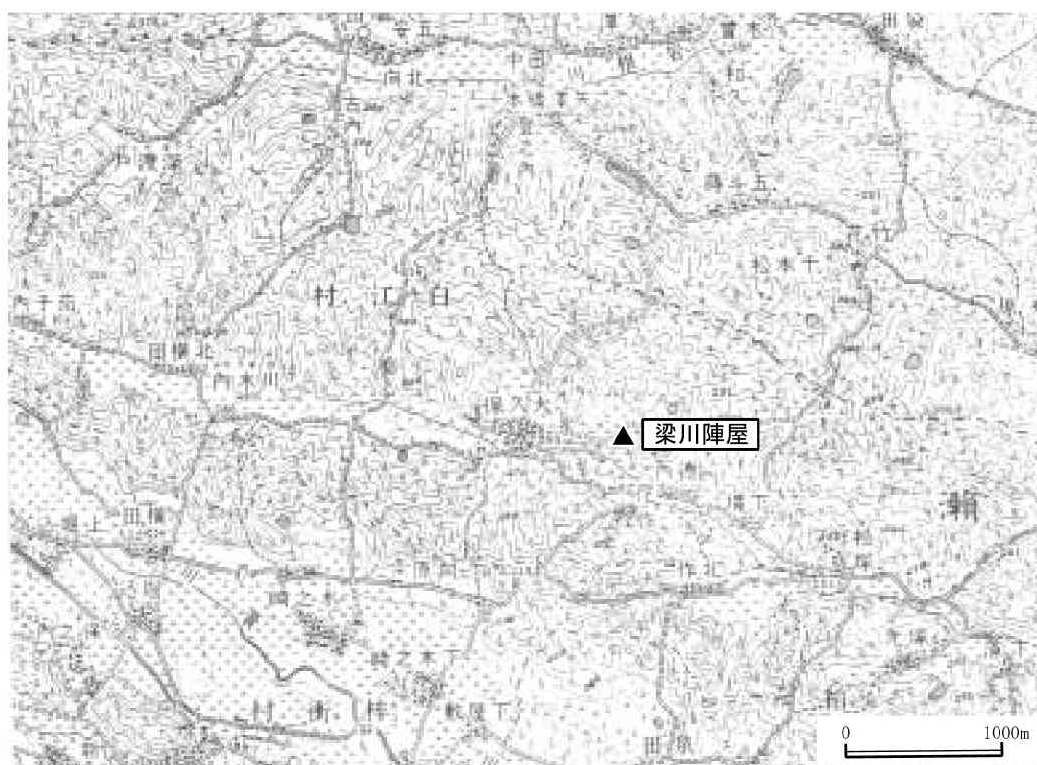


図5 梁川陣屋の位置

資料) 陸地測量部5万分の1地形図「桑折」(明治41年測図同45年製版)

3,142石の合計1万石に替えられて拠点を陸奥へ移し下村藩が成立した。信夫郡下村に陣屋を置いた。陣屋は延享3(1746)年から宝暦5(1755)年まで下野国宇都宮藩の陣屋を利用したとみられている(図7)。陣屋は、米沢街道の西側に位置した。陣屋跡は現在畑地および宅地になっているが、敷地跡には田沼氏が勧請したといわれる稲荷神社が残されている。寛政4(1793)年の年号が刻まれた石灯籠が残されている。

下村は米沢街道の宿駅となった集落であった。しかし、陣屋の構築に伴った計画的な町の整備はなかったと考えられる。

以上、各陣屋と町の検討から、泉陣屋の事例が陣屋構築とそれに一体化した計画的な町といえるが、その他の例は畿内とその周辺にみられるような「陣屋町」の形態をとっていない。

2 飛地領陣屋と集落

次に、「飛地領」を支配するために構築された陣屋についてみていきたい。これらの役宅は「陣屋」のほかにも「役所」や「代官所」などと称する事例もあり、その名称は一定していない。この飛地領に置かれた陣屋について、集落との関係を検討してみたい。

(1) 八島田陣屋

寛政元(1789)年信夫・田村・楢葉の3郡23ヵ村が、同藩越後国新発田藩溝口氏の飛地領となり、その地域を統轄するために八島田村に陣屋が置かれた(図7)。これが八島田陣屋である。文

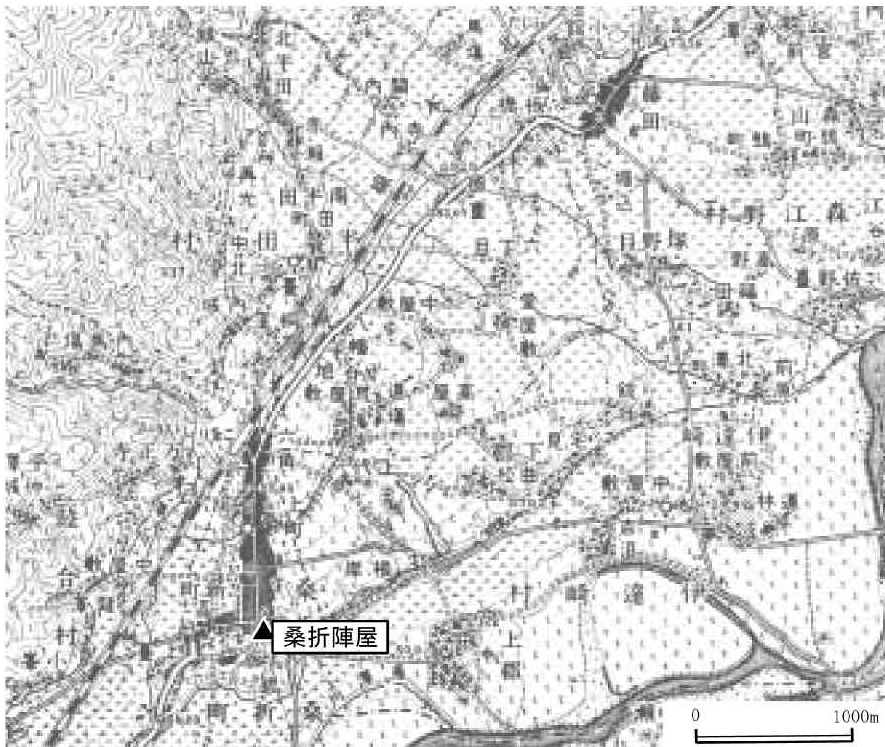


図6 桑折陣屋の位置

資料) 陸地測量部 5 万分の 1 地形図「桑折」(明治41年測図同45年製版)

政13年に村替えがあり、3郡のうち1万3000石余が上知された。新発田藩領は信夫郡内8力村6700石余を残すだけとなり常駐する役人などの組織が縮小したようであるが、幕末まで陣屋は存続した。陣屋の場所は、近世初期に整備された米沢街道の北側、八島田村内の字東本庄町にであった。近年、宅地造成が進みその場所がわかりにくくなってしまった。「八島田陣屋復元見取図」によると、敷地内に陣屋、米倉、牢屋、道場、稲荷神社がみられる。表門は西側にあった。

(2) 下村陣屋

延享3(1746)年下野国宇都宮藩の所領が陸奥に成立した際に下村に陣屋が置かれた(図7)。その規模は35間×28間であった。その後、宝暦5(1755)年には幕府領となったため、陣屋は廃止された。さらにその後、大名陣屋として転用されていった。すでに述べた通りである。

(3) 内町陣屋・前田陣屋

陸奥国内に下総国関宿藩の飛地領が2期(前期と後期とする)にわたって成立したことにより陣屋が置かれた。前期は延享4(1747)年に信夫郡9カ村8,600石余の飛地領で陣屋は内町村の常永寺の屋敷に置かれた。この敷地の面積は1反8畝18歩とされる。明和6(1769)年にはこの飛地領は幕府領となったため陣屋は廃止され、屋敷は常永寺に返された。後期は天明7(1787)年に先の9カ村のうち1カ村を除く合計8カ村の飛地領が創設され、陣屋は前田村に置かれた(図7)。前田陣屋は、駐在所(旧信夫公民館敷地付近)に構築されたようであるが詳細はわからない。

前田村の西には大森村が隣接し、同村内には南北に長い街村状の集落が展開している。北から

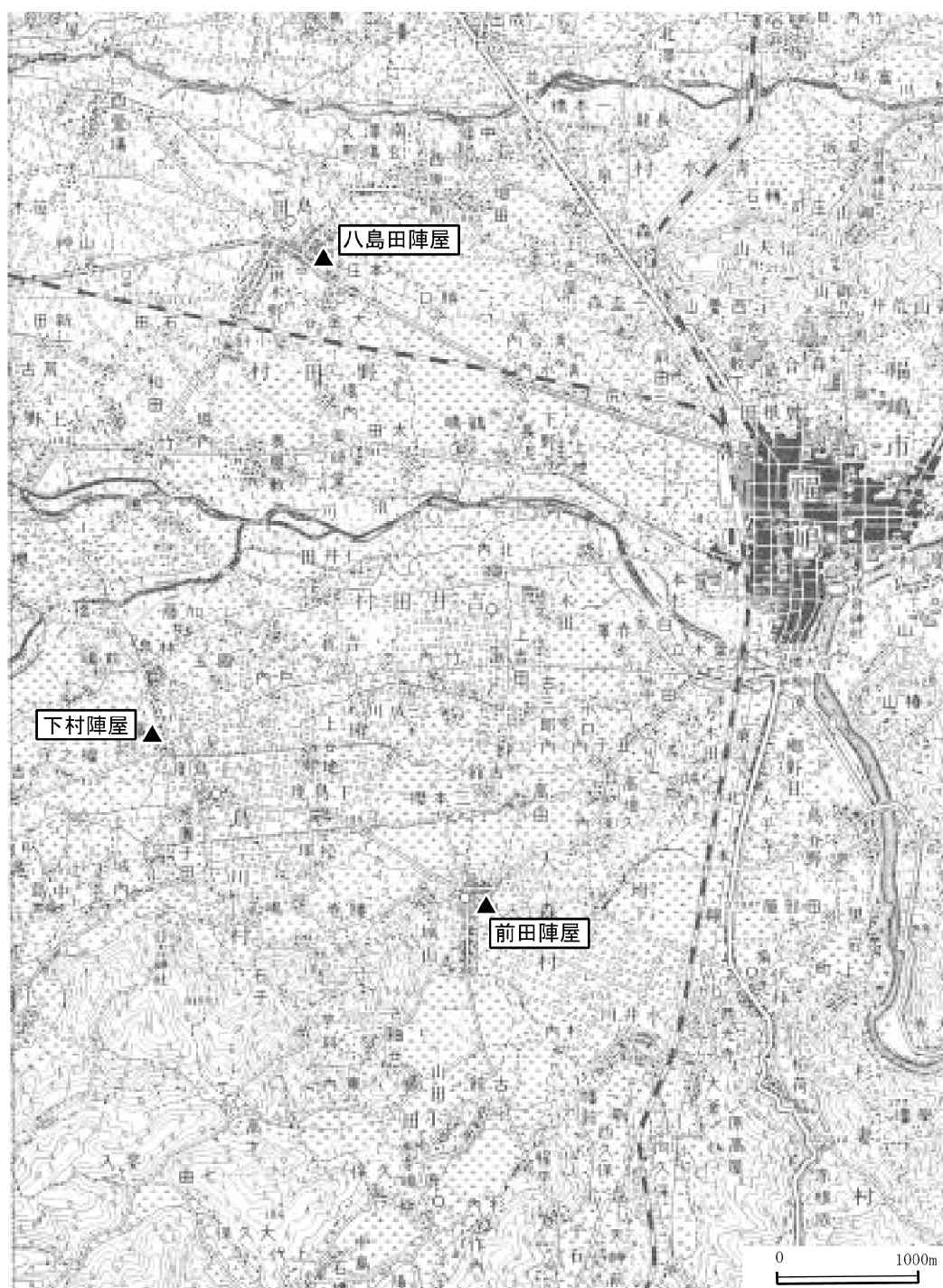


図7 八島田陣屋・下村陣屋・前田陣屋の位置

資料) 陸地測量部 5万分の1 地形図「福岡」(明治41年測図同44年製版)

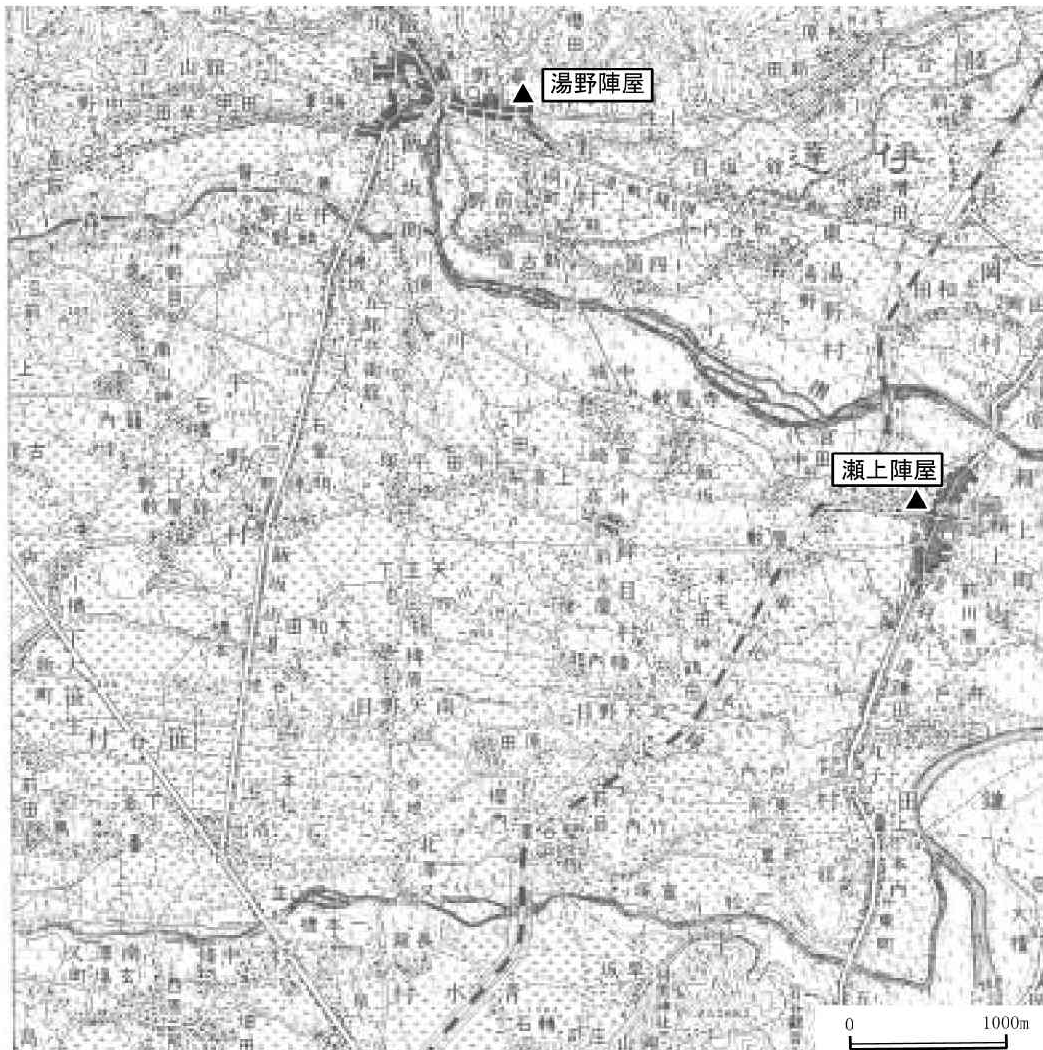


図8 湯野陣屋・瀬上陣屋の位置

資料) 陸地測量部5万分の1地形図「福岡」(明治41年測図同44年製版)

下町・本町・中町・荒町・並柳と順に町並みが続いている。この町並みは、さらに西に位置する城山(143.6m)の城下にあたる。したがって、これらの町の東に隣接した前田陣屋は、集落に付帯するように構築されたとみなすことができ、新規に計画された「陣屋町」ではなかった。

(4) 湯野陣屋

三河国刈谷藩土井氏は2万3,000石であったが、寛政4(1792)年、三河国の本領は1万石が残され、残り1万3,000石は、陸奥国内の信夫・伊達郡1万石と磐前郡7ヵ村3,000石に替地となった。信夫郡4ヵ村、伊達郡8ヵ村合計1万石の飛地領が成立した際に陣屋が構築された(図8)。その後、文化11(1814)年には同藩領信夫郡4ヵ村と磐前郡の7ヵ村は上知され、伊達郡6ヵ村に置き替えられた。したがって、陸奥国内の分散的な領地は伊達郡14ヵ村に集約されたことになる。



図9 保原陣屋の位置

資料) 陸地測量部 5万分の1地形図「保原」(明治41年測図同44年製版)

この信夫・伊達郡1万石の飛地領を統轄するために陣屋が伊達郡湯野村字高畑に構築された。陣屋跡は現在の西根神社境内を含んだ場所にあたる。陣屋は廃藩置県まで置かれていた。湯野村は摺上川の左岸に位置し、その対岸にあたる同川右岸には上飯坂村があった。上飯坂村は南の福島から茂庭へと北上する飯坂街道上あり、摺上川と接する場所に南北に長い集落が形成されていた。飯坂温泉としても知られている。その集落から摺上川を渡って桑折方面へ道路が延びる。集落はその道路に沿って東西に展開している。その集落北側が陣屋の敷地であった。したがって、陣屋を核とした「陣屋町」ではない。

(5) 瀬上陣屋

寛政12(1800)年に備中国足守藩木下氏が替地によって信夫郡16ヵ村・安達郡9ヵ村の合計25ヵ村込高2万2,000石余を与えられたことにより飛地領が成立した。木下氏の惣領分が3万石余であったので、この替地は全体の約73%にあたる。この飛地領を統轄するために陣屋を信夫郡宮代村に構築した(図8)。その敷地は南北に長い瀬上宿荒町(瀬上村内)の西側に接する場所であった。「瀬上陣屋見取図」によると、飯坂街道から石畳の道を通じて表門に至り、その前には代官川が流れていた。敷地内に代官、手附・手代などの建物があった。また、最上稲荷神社も勧請されていた。瀬上の町は、すでに宿駅機能をもった集落として発達していたことから、陣屋と町との関係については、町に陣屋が付帯した形態と考えて良いであろう。

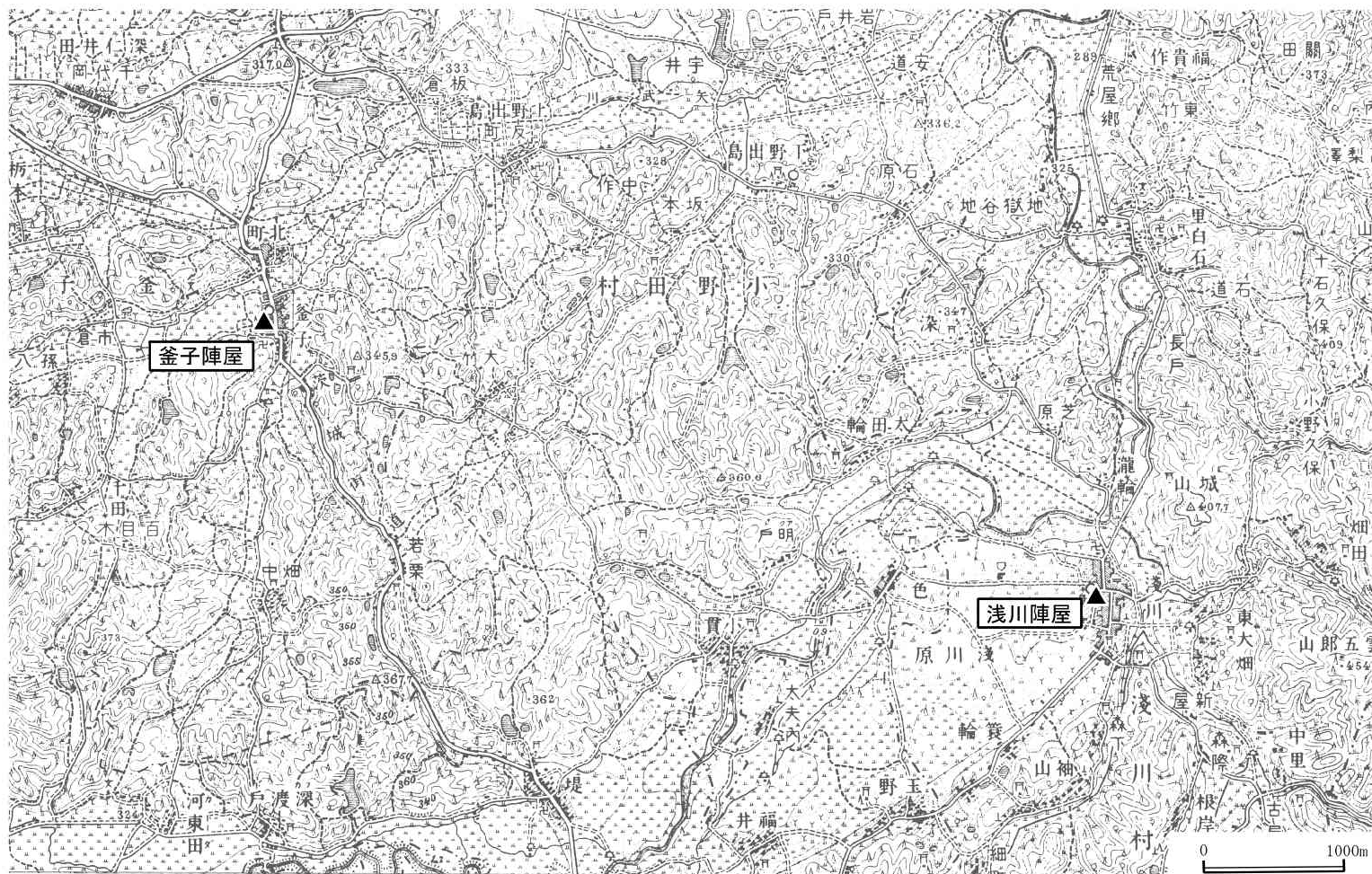


図10 浅川陣屋・釜子陣屋の位置

資料) 陸地測量部 5 万分の 1 地形図「棚倉」(明治42年測図同42年製版)

(6) 保原陣屋

寛保2(1742)年に伊達郡内17ヵ村2万500石余が白河藩領となった際に、陣屋が下保原村の赤間小路に置かれた。この場所は、南北の梁川街道に形成された街村集落の東に位置した(図9)。集落内には字名十日町、五日町、晦日町、鉄砲町がある。街村集落は下保原村の南に位置した中村と市柳村にも続き、保原町を構成していた。陣屋は街村集落に隣接するように立地し、一見、一体化したように見えるが、陣屋の構築期と集落の形成期は異なっている。

(2) 浅川陣屋

陣屋が浅川に構築されたのは、寛保元(1741)年以降のことである。榊原氏が播磨国姫路から越後国高田へ移封された時にはじまった。所領15万石のうち越後領は6万7400余、陸奥領が8万4,600石余であった。浅川陣屋は陸奥領を統轄するために構築された(図10)。

当初は、本町東裏にあったが、文化元(1804)年の火災により焼失し、翌2年に本町西裏に移された。陣屋の敷地は方形をしており、南側が大手となっていた。周囲は堀と土塁で囲まれていた。

文化6(1809)年、榊原氏の陸奥領のうち5万石が越後領に付け替えとなったために、浅川村は高田藩榊原氏の支配から離れた。そこで、高田藩の陣屋は縮小した飛地領内へ移転することになり釜子村が陣屋地とされた。榊原氏支配から離れた5万石は幕府預り領として榊原氏へ預けられたため、浅川陣屋は引き続き機能した。

南北にやや長い街村的な集落が町である。集落東側を北流する殿川を挟んだ対岸の城山には浅

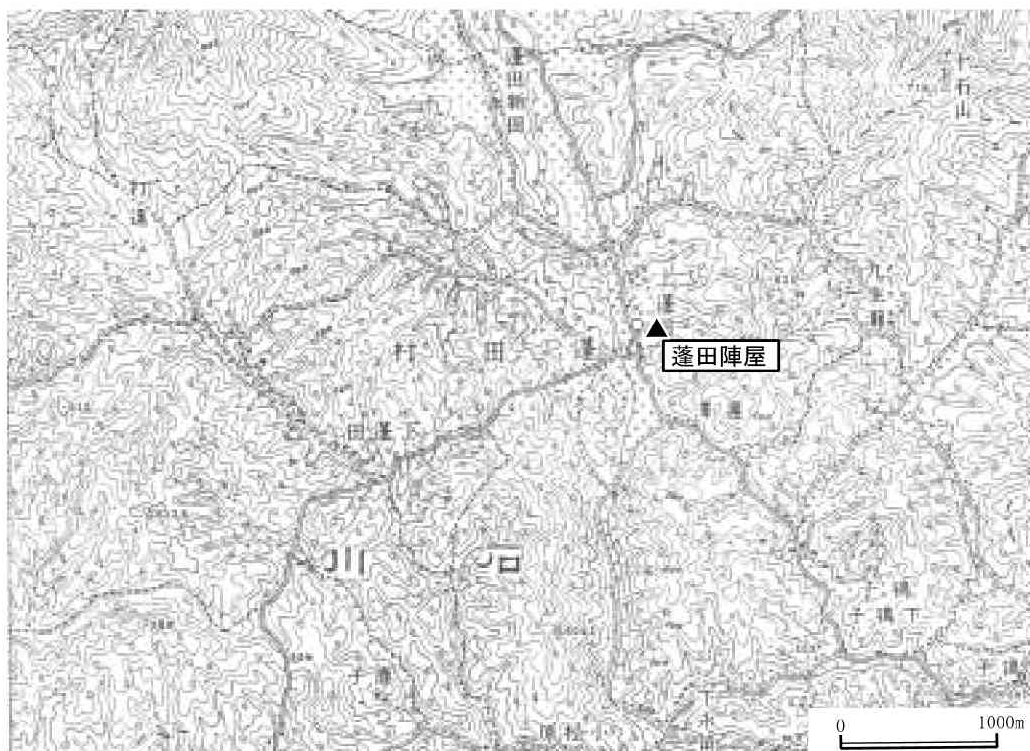


図11 蓬田陣屋の位置

資料) 陸地測量部 5万分の1地形図「小野新町」(明治41年測図同44年製版)

川城があった。この集落は浅川城の城下とみなすことができる。したがって、陣屋構築時に新規に整備された町ではなかった。陣屋跡は浅川小学校の敷地となっている。

(3) 釜子陣屋

釜子に陣屋が構築されたのは、文化6（1809）年のことである。越後高田藩榊原氏が石川・岩瀬・白河・田村各郡に8万4,000石の飛地領をもち、その統轄のために石川郡浅川村に陣屋を構築したが、文化6（1809）年に飛地領のうち5万石が幕府領となったがそのまま高田藩領預で、高田藩領の飛地領は残り3万石余となった。陣屋が置かれた浅川村は幕府領になったために、規模縮小となった飛地領域の釜子村に陣屋が構築された（図10）。釜子陣屋が統轄した領域は、白河郡27カ村、岩瀬郡14カ村の合計41カ村であった。飛地領といえどもかなり広範囲を統轄していた。

釜子村は本町と北町の2つの集落で構成されている。慶安年間（1648～52）に字北町に本村を移転し、元禄年間（1688～1704）年頃までには上釜子と下釜子に分村した。本町は街村的な集落形態をとっており、今でもその面影が残されている。陣屋はその西側に構築された。陣屋が構築される前にすでに街村形態の集落はあった。

(8) 蓬田陣屋

寛政2（1790）年に石川郡10カ村と岩瀬郡2カ村の合計12カ村が常陸国土浦藩領となり飛地領が成立した。そこで、土浦藩は石川郡下蓬田村に陣屋を置いた。陣屋は字館ノ前に構築された（図11）。この場所は中世の蓬田館跡の麓にあたり、城下のような集落が西側にあるので、陣屋は蓬田館と集落との間に構築されたことになる。しかし、集落に付帯するように構築された陣屋であって、町のような整備は行っていない。

(10) 神谷陣屋

寛延2（1749）年、磐城・磐崎・田村3郡内に笠間藩牧野氏の飛地59カ村3万石が成立したために、その領内にあたる中神谷村に陣屋が置かれた（図12）。そこで神谷陣屋と呼ばれている。最初は、小名浜代官の代官陣屋を使用し、その後、夏井川の北にあたる字荻萱の地に移ったとされる。この地は街道筋の南側に位置し、集落部に隣接していた。安永6（1777）年から寛政2（1790）年の間、牧野氏の大坂城代就任に伴い、陸奥の飛地領は安藤氏に預けられたが、その後、再び牧野氏の所領に復した。この期間も陣屋は安藤氏が使用していたとみられる。字荻萱の陣屋は洪水の危険性があるため、文政6（1823）年に字石脇に移転した。現在、陣屋跡地の一部は、いわき市立第六小学校の敷地となっている。この地は街道筋の集落部よりも北側に位置し、集落部に接していない。陣屋の敷地には山を背後に自然の地形を利用した場所が選定されており、その選定にあたっては自然災害の回避や軍事の条件が優先されたと考えられる。

敷地の周囲は三方が板塀で外郭をめぐらしていたという。敷地内には、役所を中心に郡奉行官宅2棟、代官官宅5棟、僚属官宅2棟が前部に配置され、後部には足輕長屋、普請小屋、倉庫などが備えられていた。

以上の検討から、飛地領における陣屋は、敷地選定にあたり交通の要所等の条件をふまえ、既存の集落、とくに宿機能をもった街村集落の一角構築される事例が多かった。その集落は江戸期前に形成された城下に相当する例もみられた。陣屋の敷地は方形で周囲を堀や土塁で囲まれた例



図12 神谷陣屋の位置

資料) 陸地測量部 5 万分の 1 地形図「平」(明治 41 年測図同 44 年製版)

もあったが、その多くは防御的な施設がなく、戦闘力はほとんどなかった。それゆえ、幕末の動乱の中で敷地内の施設が容易に焼き払われた例があった。敷地内は平地で代官や手代の役宅と居所などが配置されたほか、穀蔵、稻荷神社などがあった。